

『曾根崎心中』から『お初天神記』へ

——浄瑠璃本を通してみる作品の変遷——

森谷裕美子

よく知られるように『曾根崎心中』は元禄十六年五月に大坂の竹本座で上演された浄瑠璃作品である。初演者は竹本義太夫、作者は近松門左衛門。その後、この作品は京都の宇治座、大坂の豊竹座等で部分的に改変されながら舞台にかけられた。本稿では竹本座の『曾根崎心中』以後、豊竹座で上演された『曾根崎心中十三回忌』（正徳五年）、および『お初天神記』（享保十八年）について、浄瑠璃本を通して考えてみたい。

一、諸本

『曾根崎心中』から『お初天神記』へ至る作品の変遷に関連すると思われる諸本、とくに豊竹座との関わりが想定される本を中心にあげる。^{注1}管見に入ったものは次のとおりである。

①『曾根崎心中十三回忌』八行三十三丁（所蔵）天理大学附属天理図書館・個人

②『曾根崎心中』八行二十四丁（所蔵）個人

③『曾根崎心中』八行二十四丁（所蔵）文楽協会山城少掾文

庫・東京女子大学図書館・天理

④『曾根崎心中』八行二十四丁（所蔵）早稲田大学演劇博物館・早稲田大学附属図書館

⑤『お初天神記』八行三十一丁（所蔵）個人

⑥『曾根崎心中』七行三十八丁（所蔵）天理・大阪大学附属図書館

⑦『曾根崎心中』七・八行四十八丁（所蔵）鳥居文庫

⑧『お初天神記』六行四十七丁（所蔵）大東急記念文庫・東京芸術大学附属図書館・早大演博ほか

このうち①から⑤までは部分的に同板、あるいは同板と見違えるほど似通う板木を共用している。以下、このように同板、もしくは厳密に言えば異板であっても字配りや節付などが一致し、一見すると同板と見紛うような場合には、同板、異板の両方を含めて「同板系統^{注2}」という言葉を使用させて頂く。⑥と⑦も七行で刷られた箇所的大部分は同板系統である。以下、①から⑧までの本についてももう少し詳しくみてゆく。

二、諸本の概要

①題簽「曾根崎心中十三年忌」豊竹若太夫 直傳（個人蔵本のみ。天理本は欠）

内題「曾根崎心中 付タリ観音廻リ」（図版1）

丁付 板外にあり。裁断による不明箇所が多い。丁の裏のノドに「曾三」など見える。裏のノドに「曾（丁付）」という形で見つけられている箇所は②八行二十四丁本と同板系統。また丁の表のノドにも丁付が所々に見られ「曾後又十三い」、「曾後又ろ」など「又」や「いろは」の文字を付ける。このような丁付のある箇所は増補部分で、もともと『曾根崎心中』にはなく後から加えられた文章である。

図版1 ①『曾根崎心中十三年忌』（題簽）
個人所蔵

道行見出し「曾根崎心中 徳兵衛 道行」

奥書 正本屋七兵衛、正本屋喜右衛門

ただし天理本と個人蔵本とは字体や書肆の住所等、若干の違いが認められる。

天理本（印記なし）

「右此本者依為懇望文句

音節等悉校（破れ）秘密令

開版者也

大坂南久宝寺町堺筋東へ入北側 正本屋 七兵衛

京賣所

二條通寺町西江入町南側

正本屋 喜右衛門

個人蔵本（印記なし）

「右此本者依為懇望文句

音節等悉校合加秘密令

開版者也

大坂天神橋筋泉町

正本屋 七兵衛

京賣所

二條通寺町西江入町南側

正本屋 喜右衛門

備考 先述のとおり天理本には太夫名がなく、個人蔵本の題簽から豊竹若太夫の正本で、十三年忌時の板行であることがわかる。奥書は天理本と個人蔵本では正本屋七兵衛の住所が若干異なる。

②とは十二丁分異板。おもに増補が施されている。その他は同板系統。板外は①の方が複雑で丁の裏に「曾（丁付）」を、丁

の表に〔曾後(いろは文字)〕〔曾後又(いろは文字)〕を付ける

など複雑である。丁付に「いろは」を一文字ずつふる形式は近松作品の絵入浄瑠璃本にも見られ、絵入本を後に挿絵部分と本文部分に分けて作りなおす時など、板木を再利用する際の目印に付けられる場合も多い。①と②の板式の違いをしてみる。

イ①一丁から十三丁まで同板系統

ロ①十四丁から十七丁まで異板(この間②は一丁分)

ハ①十八丁から十九丁まで同板系統

ニ①二十丁から二十七丁まで異板(この間②は二丁分)

ホ①二十八丁から三十三丁まで同板系統

増補された部分はロとニの二箇所、内容的には次のような事柄である。

ロ天満屋で徳兵衛の親方(徳兵衛の叔父でもある)久右衛門が

お初を尋ねて来て、お初に徳兵衛を戻すように意見をする。

お初から徳兵衛が九平次に乱暴されたことを聞いた久右衛門は、九平次を追おうとするがお初に引き止められて天満屋に入る。九平次も天満屋に泊まる。

ニお初と徳兵衛は人目をしので天満屋を後にする。そこへ九平次の手代茂兵衛が来て、九平次がなくて役所へ届けたたはずの印判が、九平次のかけ硯の中から見つかり、宿老から呼び出しがかかったと告げる。九平次の悪事が明らかになり、久右衛門は九平次を責めて叩く。皆はお初と徳兵衛を探すが二人の姿が見えず、大騒ぎとなる。

②題簽「曾根崎心中竹本筑後様
直之正本」

内題「曾根崎心中 付タリ観音廻リ」

丁付 裁断により不明箇所が多いが丁の裏側のノドに〔曾(丁付)〕と見える

道行見出し「曾根崎心中 徳兵衛道行
おはつ」

奥書(印記なし)

「右此本者依為懇望文句

音節等悉校合加秘密令

開版者也

大坂南久宝寺町堺筋東へ入北側 正本屋 七兵衛

京賣所

二條通寺町西へ入町南側 正本屋 喜右衛門」

備考 この本の存在は山根為雄氏にご教示頂いた。内容は通常の『曾根崎心中』。①のように徳兵衛の親方、久右衛門は登場せず、九平次の悪事も露見せず、従って九平次が久右衛門に叩かれる場面もない。①とは十九丁分が同板系統であるのに加えて、奥書、書肆名から最も関係の深い本であることが予測できる。①天理本の奥書とは形式が非常によく似ているが、字体が異なる部分があり同一のものではない。本文に関しては、道行の文章中(十九丁オ八行目)、本来なら「むめだ(梅田)」とあるべき文字が「むつだ」と彫られており(山根氏よりご教示)、その箇所①も同様である(二十八丁オ八行目)。その丁①②は③④と同板系統でありながら、③④の文字は「むめだ」であり、敲密には異板であることがわかる。①個人蔵本と②と比較

する限りでは、①の方が刷りが美しく、本の作られた順序としては①を省略して②を作った可能性もあるかもしれない。

③題簽 天理本のみ残るが破損により判読不能

内題「曾根崎心中 付アリ観音廻リ」(図版2)

丁付 板心「そねざき (丁付)」

道行見出し「曾根崎心中 徳兵衛道行」

奥書 天理本は破損。最終行のみ、かろうじて読める。文楽協会、東京女子大本(上から墨書がある)には次の通りある。

ただし印記はない。

「右此本者以太夫直傳寫之

文句音節墨譜等不殘毫

厘按合加秘密令開版者也

竹本筑後掾

備考 奥書には書肆名が記されていないが、板式から象牙屋三郎兵衛版の奥書を利用したものであることが推測できる。なぜ書肆名を省いたのかは不明。鶴見誠氏は「曾根崎心中」を考える(『正本近松全集』別巻二、勉誠社)において、この本を豊竹若太夫の初板によって作られた本であるとされた。鶴見氏は豊竹若太夫が豊竹座を再建した宝永五年の四月か五月に、豊竹座で「曾根崎心中」が上演されたと推定されている。以下は鶴見氏の文章である。

若太夫語るところの「曾根崎心中」が豊竹座で上演されたならば、必ずや西沢からその正本が出版されたであろう。ところが残念ながら現在、それは発見されていない。しかし幸いに、その初版によって作られたと思われる、若太夫浄瑠璃の八行二十四丁本が三種四冊残っている。その一種は東京女子大学の蔵本象牙屋版である。この本の奥付は「集覧四二」で、本屋の名が載っていないけれども、「集覧四一」と比較して、象牙屋三郎兵衛版であることが分かる。なおこの奥付に、筑後掾の名が載っているけれども、それは奥付だけのことで、本文は若太夫の浄瑠璃である。この東女本と全く同じ本が、文楽にも一本ある。もう一種は天理図書館の蔵本である。この本には奥付がなく、版元が不明である上に、文字が詰って、節付けの脱落も多い。第三の本は、東大霞亭文庫の本で、「集覧八四」の奥付を持つ本屋平兵衛版である。この本は先の象牙屋版と非

図版2 ③「曾根崎心中」
東京女子大学図書館所蔵

常によく似た所があるかと思うと、半分は全く違っており、心中道行には後の七行三十八丁本の節付けが入っているから、他の二本より少し遅い出版かと思われる。従って三種のうち象牙屋版が、一番善い本であるということになる。

鶴見氏の御論からはさまざまな御教示を得るが、筆者の考えとは若干異なる箇所もある。たとえば、第二種として分類された天理本については、天理本は全丁にわたり東京女子大、文楽協会本と同板系統であり、天理本のみがとくに文字が詰まっていたり、節付の脱落が多いとは思われない。ただ、東京女子大本には墨書による書き入れが多い。

また③を若太夫正本ととらえることに関しても、いま一つ積極的な判断材料が欲しい。④のうち早大演博本には奥書に豊竹越前少掾の名が記されており、豊竹座系の本であることが明白であるが、③を④より善本とする理由は何か。③と④とは五丁分が完全に異板であり十九丁分が同板系統である。比較すると観音廻りを④では四丁三分あるところ、③は四丁きっちり収めており、その結果文字が詰まっている。従って筆者は④のあとに③が板行されたと考え。そしてもう一つ、④には七行三十八丁本の節付けが入っているとの指摘があるが、④より七行三十八丁本が先にだされたという根拠はどこにあるのだろうか。そういった点などに疑問をもつ。

なおこの③は、②と比較すると観音廻りから生玉社前にかけて（四丁めから六丁めまで）の三丁分が異板。その他二十一丁分は②と同板系統。

④題簽「曾根崎心中」（墨書・演博）

内題「曾根崎心中 付テリ観音廻り」（図版3）

丁付 板心「曾（丁付）」

道行見出し「曾根崎心中の道行 徳兵衛」

奥書

演博本（印記なし）

「右傳つたゆる所の正曲しらべの調しらべは節博士せしはかせ何れも

其品多おほし和漢大字わかんのかなかひ迄

世間あやまりてあざむく類板るいばん出す甲乙かうおつ

てにはのわつか成とても正本ほんぽんにあらずこの
ゆへに改て樟あざきに寿くわく即花押はなおしの記しるしを添そへる事

然力也

図版3 ④「曾根崎心中」

早稲田大学附属図書館所蔵

大坂濃人橋詰町

豊竹越前少掾
正本屋
平兵衛板

早大図本（印記なし）

「我等かたり本の通ちがひなく写させ進し候
此外口傳とてさのみむつかしき事もなく候
たゞ人の心を慰るを秘傳にいたし候しかし
ふし付は作意と文句のはだゑが大事にて
秘事はまつげとやかしく

大坂 濃人橋詰町 本屋
花屋町西側 平兵衛板

備考 演博本と早大図本は同板（『正本近松全集』四解題）。早大図本は大夫名を記さない。演博本は奥書に豊竹越前少掾の名がみえる。②とは道行の二丁分（二十八、二十九丁）が異板。③とは前述の通り五丁分が異板。

⑤題簽 不明

内題「お初天神記 豊竹越前少掾」（図版4）

丁付 板心「曾（下方に丁付）」

（丁付）は次の如し（二十六、二十七枚目は丁裏板外）。後

口二：十二、後一：後四、十四：十六、後五：後十、

初道二了、廿一：廿三、後三十

道行見出し「道行ちしごの霜」

奥書（印記なし）

「右傳ゆる所の正曲の調は節博士何れも

其品多し和漢大字のかなつかひ迄
世間あやまりてあざむく類板出す甲乙
てにはのわつか成とても正本にあらずこの
ゆへに改て樟に寿く即花押の記を添る事

然力也

大坂濃人橋詰町 豊竹越前少掾
正本屋 平兵衛板

備考 この本は以前諏訪春雄先生にお借りしたコピーで確認した。コピーの状態があまり良くなく、かつ原本を調査していないので、丁付などの書誌はコピーに付されていた鶴見誠氏のメモを参照させて頂いた。①②④とは十五丁分異板。⑤と①②④における同板系統と異板の箇所は次のとおりである（尚、③と



図版4 ⑤「お初天神記」個人所蔵

は十八丁分異板で、その他は同板系統)。

A ⑤一丁め異板

B ⑤二丁から十二丁まで同板系統

C ⑤十三丁から十七丁まで異板(この間①は五丁分、②④は一丁分)

D ⑤十八、十九丁同板系統

E ⑤二十丁から二十七丁まで異板(この間①は八丁分、②④は

四丁分)

F ⑤二十八丁から三十丁まで同板系統

G ⑤三十一丁め異板

増補部分はCとEで、増補内容は語句の細かい違いと節付を除き、①『曾根崎心中十三年忌』と同じである。むしろ『お初天神記』の特徴はGであり、最終一丁分が異板である。ただ通常『曾根崎心中』と文章が異なるのは実質半丁分で、結末が変えられている。道行の後、天神の森で徳兵衛は心中するつもりでお初を刺す。そこへ久右衛門らが駆け付け、九平次の悪事が明らかになったことを話し、徳兵衛の自害を止める。つまり、お初は徳兵衛によって刺されて死ぬが、徳兵衛は助かる。享保七年の心中禁止令以降の浄瑠璃作品にはよく見られる傾向かもしれないが、わずか半丁で九平次の悪事に決着がつけられ、徳兵衛の命が助かるという唐突な終りかたである。お初の死に場所として、曾根崎の社が人々に語り伝えられるようになったという記述により、作品はしめくられる。⑤CEGと⑧西澤六行本とは、文章の違いはほとんどなく、節も節章の位置

が少しずれる程度、あるいは数箇所異同で、さほど大きな相違はない。ただしCEを①『曾根崎心中十三年忌』と比較すると、詞章の違いが二十数箇所あり、紙面の都合上すべてを指摘することはできないが、左に詞章が異なる例をあげてみた。ほとんどが単語レベルの相違であるが、まれに文章が挿入されているところもある。

後述する⑦『曾根崎心中』は①『曾根崎心中十三年忌』とほぼ同様の本文をもち、『曾根崎心中』を増補した文章の翻刻が『紀海音全集』第七卷(清文堂)に掲載されている。本文の相違を掲げるにあたり、『紀海音全集』本文と比較する形で書き出してみる。ただし、文字遣いや漢字表記、濁点、句読点の違い等に関してはいちいち指摘していないところがある。つまり⑤にあげた本文は、かならずしも原本通りの表記、文字遣いでないことをお断りしておきたい。また特に記述しない限り、⑤の本文は⑧西澤六行本とも共通している。

○三九一頁十一行(『紀海音全集』七、以下同)

⑦ちよとよびだしてとい、ければ

⑤ちよとよびだしてといふやいな

○三九二頁七行

⑦そこ程のぎをわきまへぬ

⑤それ程の事をわきまへぬ

○三九三頁一行

⑦徳兵衛事は某が

⑤徳兵衛事は久右衛門が

○三九六頁十三行

⑦二人つゞいてつと出。

⑤二人つゞいてつと出。かほを見合せア、嬉しと

○三九六頁十六行

⑦はしり行にけり暫く有て。

⑤はしり出てゆく。かくとはしらずゆうくくと。下女はひとも

し是はさて。かどのがあいてあるみな氣のつかぬとかげが

ねをしめてへねまへそ入にける。暫く有て。

○三九八頁三行

⑦うし／＼としてゐたりけり

⑤もじ／＼としてゐたりけり

○三九八頁四行

⑦身共は子とて持ませす女はうかめいと見合せ

⑤身共は子とて持ませす女はうかめいとめ合せ(⑧は「持ませす」)

節章の違いについては、以前山根為雄氏が⑥筑後掾七行本と

『お初天神記』を道行部分について比較され、かなりの違いがあることを指摘されている。^{注5}増補部分を中心に比較すると①⑦

『曾根崎心中十三年忌』と⑤⑧『お初天神記』には、それぞれに共通する節章が付けられている。そして①⑦と⑤⑧における

相違は、文章の違いよりも節付の違いの方がよほど顕著なものとなっている。同じ若太夫が語ったはずの『曾根崎心中十三年

忌』(⑦を含む)と『お初天神記』の節章はなぜ、この様に異なるのであろうか。山根氏もすでに言及されているが、^{注6}それぞれ

れの作品ごとに節章が相違する。もう一つ興味深いのは、書肆や板が変わっても、節付は受け継がれることである。⑤は④を利用してところどころに別板を挟み増補した安易な作りの本であるが、⑤で示された節章は、⑧西澤板に踏襲されている。そしてそのことは①と⑦とに関しても同様にいえる。ただし⑦の場合は早く出されたのが西澤板であり、それが①喜右衛門、七兵衛板の節章へとつながっている。

道行の見出しは『曾根崎心中十三年忌』が「道行野邊の露」とするのに対し、『お初天神記』では「道行ちしごの霜」となる。『お初天神記』は冬の上演であったのであろうか。^{注7}

⑥題簽「曾根崎心中 附観音めぐり」(阪大、天理本共に墨書)

内題「曾根崎心中 付タリ観音めぐり」

丁付 板心 心 … 心廿八

道行見出し「心中野邊の露」

奥書(阪大、天理共に印記なし)

「右此本者依為懇望文句音節等

悉校合加秘密令開版者也

竹本筑後掾

大坂 三休 橋博 芳町 西澤藤九郎板
上久寶寺町三丁目 西澤九左衛門板

備考 内容は通常の『曾根崎心中』だが西澤板であり、豊竹座系の本ではないかという疑問がおきる。近松作品が西澤(正本

屋九左衛門) から出された本としては、『吉野都女楠』等、他に数例を知るが、筑後掾と西澤九左衛門の両方の名を記す同じタイプの奥書を持つ本はまだ確認していない。山根為雄氏は⑥の本に關して、詳細な調査の結果「曲節を左右するほどの異同も、豊竹座正本に共通した特色も認められない」と述べておられる。^{注8} 詞章、節章ともに豊竹若太夫の特色が現れていないにも関わらず、奥書の書肆名および⑦に板木が流用されているという事柄から豊竹座との関連を指摘される本である。

⑦題簽 欠

内題「曾根崎心中 付タリ観音廻り」(図版5)

丁付 板心、下部に 心一…心二十、廿一…廿四、心廿二…

心廿六、又廿六、の廿七、心廿八、又廿九、又三十、

又卅一、心三十…心卅八

道行見出し「心中野邊の露」

奥書「右之本 遂吟 覧頌 句音 節墨

譜等 不違 毫釐 令加 筆且 以

著述之全本 令校合畢 尤可

為正本也

豊竹若太夫(印)

紀海音

大坂上久宝寺町三丁目

正本屋 西澤九左衛(破れ)(印)

備考 ^{注9} 諏訪春雄氏によって紹介された旧守隨憲治氏所蔵本で、

現在は鳥居フミ子氏の御所蔵。前述のとおり増補部分の翻刻が『紀海音全集』第七卷、影印が『鳥居文庫浄瑠璃稀本集』一(勉誠社)に載る。先学ご指摘の通り、⑥七行西澤板に八行十丁分を増補したもの。増補内容及び増補箇所(節章)は、①とは同じ。ただし①とは異板。『曾根崎心中』の十三年忌をあてこんで出され、①よりは早い板行。^{注10} この⑦の奥書により、十三年忌の増補者は紀海音であろうことがわかる。

増補箇所(冒頭、⑦に「なくより外の事ぞなき。かゝる所へ此里なれぬ」(『紀海音全集』七、三九一頁六行め)とある文章が、①では「なくより外の事ぞなき。涙かたてに表をみれば此里なれぬ」となっている。また⑦は道行直前に「みじかけれ」という語を付しており、道行冒頭(八行増補部分)の「みじかけれ」と言葉が重複する。

図版5 ⑦『曾根崎心中』鳥居フミ子氏所蔵『鳥居文庫浄瑠璃稀本集』一より転載

⑧題簽（以下の書誌は早大演博本による）

「お初天神記 豊竹越前少掾直傳

正本屋九左衛門版（印）」

内題「お初天神記 豊竹越前少掾直傳」（図版6）

丁付 板外 初巻 初四十七

道行見出し「道行ちしごの霜」

奥書「右俳優曲調者以通俗為要

故隨物関字正字俗字各為

用捨而文句明也且子自加

墨譜誠為正本云尔

豊竹越前少掾（印）

大坂心齋橋南四丁目西側 九左衛門（印）

備考 この本はかなり出回ったらしく所々に所蔵が確認できる。前述のとおり増補部分は詞章、節章ともに⑤とほとんど同様である。本の作りから考えて⑤の方が早い板行であろう。

三、「曾根崎心中」から「十三回忌」そして

『お初天神記』

以上、竹本座で初演された『曾根崎心中』が、豊竹座で正徳五年に『曾根崎心中十三年忌』として増補上演され、さらに享保十八年に『お初天神記』へと改変されてゆく過程を淨瑠璃本を通してみた。

『曾根崎心中』は正徳五年の十三年忌時に、豊竹座で、新しい板木を入れ込むような形で増補された。それが⑦『曾根崎心中』と①『曾根崎心中十三回忌』である。⑦は丁付からみて、恐らく⑥を流用して刷られたと思われる。増補部分は八行で書かれ、天満屋の場面に二箇所増補をほどこしている。①も②に対してほぼ同文の増補が見られるが、⑦よりは後の板行と考えられる。文章、節章ともに⑦と①は、ほとんど共通している。⑥⑦は西澤板、①②は喜右衛門、七兵衛板。板木を利用しているのはそれぞれ同じ書肆である。ただ内題は両本ともに「曾根崎心中」とあり、節章も若太夫の語りを反映してはいない。①は題簽のみにより豊竹若太夫の本であることがわかり、⑦は奥書に豊竹若太夫と紀海音の名が記されているだけである。現在残る①や⑦が十三回忌時のために作られた本であることに異論はないが、内容そのものは若太夫のものとはいえず、

図版6 ⑧『お初天神記』早稲田大学演劇博物館所蔵（二10-44）

そのことに對しては多少注意が必要かもしれない。

享保十八年の『お初天神記』も『曾根崎心中』を増補する形でつくられた。⑤は④の平兵衛板を利用している。文章については『曾根崎心中十三年忌』と同じ箇所を増補と、結末部分の改変がほどこされている。心中は遂げられず、お初だけが死ぬ。天満屋の場面における増補は⑦や①の文章と僅かな相違しがなく、文章だけの違いを見れば板木流用も可能であるように思われるが、少なくとも⑤に關しては、⑦や①の板木を利用していいない。節付けは⑦や①の『曾根崎心中十三年忌』と比べてかなりの変化をみせ、その相違は書肆の異なる⑧西澤板六行本にも受け継がれた。結果として『曾根崎心中十三年忌』と『お初天神記』は、節章に關して断絶が認められる。⑤が、⑦や①の板木を利用しなかつたのは、あるいは節章を変える必要があつたからであらうか。いずれにせよ、管見に入った『曾根崎心中十三回忌』(⑦を含む)と『お初天神記』の本の作られ方を見て行く限り、『曾根崎心中』から『曾根崎心中十三年忌』、『曾根崎心中』から『お初天神記』という二つの方向を示す形であり、『曾根崎心中十三年忌』を利用した『お初天神記』は見当たらなかつた。

⑦『曾根崎心中』により、十三回忌時の増補は紀海音の執筆にかかることが推定されている。ただし『曾根崎心中十三年忌』の最終結末を変えただけの『お初天神記』本文が、紀海音作である確証はいまだ得られていない。

『曾根崎心中』に關しては様々な浄瑠璃本が刊行され、現在のところ十八種を確認することができる。そして、その諸本は語り手である太夫の竹本義太夫、宇治加賀掾、豊竹若太夫との座により、竹本座系、宇治座系、豊竹座系の三種に大別される。しかし豊竹座系の本に關しては、書肆名から豊竹座との関わりが想定できたり、あるいは題簽や奥書に豊竹若太夫や越前少掾の名を記すといった事にとどまり、内容的に著しい特徴のあるものではなかつた。山根氏が指摘されたとおり、⑥七行本や④平兵衛板が若太夫の曲節の特色を示す本ということではできない。ただ、それらの本が、⑦と①『曾根崎心中十三年忌』や⑤『お初天神記』という作品を作るのに際して利用されていることから、逆に豊竹座との密な繋がりが指摘できるのである。

注

- 1 『曾根崎心中』の諸本については、山本とも子氏『曾根崎心中』の諸本(「近松の研究と資料 第二」演劇研究会)、森修氏『曾根崎心中』(新典社)、諏訪春雄氏『近世世話物集』一(角川文庫)、山根為雄氏『曾根崎心中』の諸本について(「藝能史研究」七十二号)等を参照せて頂き、拙稿『曾根崎心中』(加賀掾十行本)「歌舞伎浄瑠璃稀本集成」下(八木書店所収)をまとめたことがある。

2

たとえば図版1、2は文字の配置、節付等は一致する

が、冒頭の「げ」の字などに形の違いが認められ、厳密な意味で同板とはいえない。また図版3は冒頭の節付が図版1、2と異なり「うたひ」と仮名で表記されている。このような場合に「同板系統」という言葉を使用した。

3 「集覧四二」は③の形式の奥書。書肆名はない。「集覧四一」は「集覧四二」の大夫名の後に象牙屋の名前がみえる。「集覧八四」は④の形式の奥書。なお鶴見氏は東大霞亭文庫の本と記されるが、この本は「渡辺藏書」及び「霞亭文庫」の印のある早大図書館本と考えられる。

4 「曾根崎心中」諸本の刊行順序について、山根為雄氏は『近松正本考』三〇八頁（和泉書院）において「喜」（筆者注・本稿②以下同）は『曾根崎心中十三年忌』にも版木が流用されている正本で、恐らく（喜）を模して（平）④が作られ、（喜）に依拠しながら（平）をも参考にして作られたのが（不）③であろう。」と述べられている。

5 山根氏前掲1

6 山根氏は前掲1において「若太夫が実際に語る際には自己に適した、例えば「お初天神記」にあるような曲節で語ったのであろうが、筑後掾が当たりをとった「曾根崎心中」の外題を用いる限りに於いては、初演者であり原曲者である筑後掾に敬意を表して、正本はあえて殆ど筑後掾の曲節のままにし、そのため筑後掾の名で西沢か

ら出版したのが七行本ではなからうか。」と述べておられる。

7 『義太夫年表』近世篇一（八木書店）によれば「お初天神記」の初演は享保十八年二月二日。

8 山根氏前掲1

9 『近松世話浄瑠璃の研究』（笠間書院）

10 諏訪氏前掲10。『紀海音全集』第七巻

11 山根氏前掲1

〔付記〕

拙稿をなすにあたり、資料の閲覧及び掲載を御許可頂きました所蔵機関、所蔵者の方々に篤く御礼申し上げます。